

## P1-037

## 乳幼児のメディア接触と母親の意識・行動との関連

遠藤 有里、藤原 汐里、杉原 佑美、  
祖田 亜希子、村上 怜花、花木 啓一、  
南前 恵子

鳥取大学医学部 保健学科

## 【目的】

近年、乳幼児を取り巻くメディア環境が変化し乳幼児期においてもメディア接触が日常的となっていがる。しかし、乳幼児をもつ親に対する子どものメディア接触についての意識調査は少ない。そこで、子どものメディア接触に対する母親の意識の実態を調査し、母親への指導の必要性を検討することを目的に調査した。

## 【方法】

A市の幼稚園・保育園に通う子どもを持つ母親367名を対象としてアンケート調査を行った。プライバシーの保護、自由意志による参加などを文書にして回答を依頼した。なお、この研究は鳥取大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 【結果】

回収数は209部で有効回答は189部（有効回収率51.2%）であった。母親と子どものメディア接触時間の関係は、母親の接触時間が長いと子どもも長かった。子どもにメディア接触をさせる目的は子守が多かった。メディア接触時のルールは乳児期ではルールを決めていない母親が多く、幼児期は乳児期に比べルールの項目が増えていた。子どものメディア接触に対する母親の抵抗感はテレビ、録画・DVDは「抵抗感がない」と回答した母親が多く、スマートフォン、タブレット端末、パソコンは「抵抗感がある」と回答した母親が多かった。母親の抵抗感があると子どものメディア接触時間が短い傾向がみられた。メディア接触が子どもに及ぼす影響に対する質問には、よい影響が選択肢12項目のうち2項目以下、悪い影響は13項目中3項目以下の回答をしたものが過半数であった。

## 【考察】

乳幼児期の子どものメディア接触には母親のメディアとの関わりや意識が関係していることが示唆された。また、子どもの年齢が上がればメディア接触の目的が多様化し、メディア接触時間が長くなると考えられる。今後、メディアと上手く付き合っていくために、母親自身がメディアとの付き合い方を見直し、どのように子どもに指導していくのかを考えなければならぬ。そして、各家庭の生活習慣に合わせたメディア接触を見直す機会を作ることが重要である。

## P1-038

## A大学における非医療系大学生の喫煙行動と認識に関する実態調査

細野 恵子<sup>1</sup>、佐賀 嬉幸<sup>2</sup>、杉浦 潤哉<sup>3</sup>、  
中條 亜友未<sup>4</sup>

<sup>1</sup>旭川大学保健福祉学部 保健看護学科

<sup>2</sup>町立中標津病院

<sup>3</sup>名寄市立総合病院

<sup>4</sup>札幌北楡病院

## 【目的】

非医療系大学生の喫煙行動とその認識に関する実態を明らかにし、喫煙行動に与える影響を検討する。

## 【方法】

A大学における非医療系学生1～4年生を対象に、2017年5～7月に無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は喫煙行動、喫煙に対する認識（加濃式社会的ニコチン依存度調査票：Kano Test for Social Nicotine Dependence；KTSND、喫煙動機評価尺度：The Reasons for Smoking Assessment Scale；RSAS、ニコチン依存度尺度：Fagerstrom Test for Nicotine Dependence；FTND）、基本的属性とした。調査票の配布は教員に依頼し留置法にて回収した。分析は、喫煙経験者・非喫煙者間で喫煙行動およびKTSND得点を比較（ $\chi^2$ 検定、Mann-WhitneyのU検定）し、喫煙者についてはRSAS・FTND間の関連（Spearmanの順位相関分析）を検討した（ $p < 0.05$ ）。倫理的配慮として所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

## 【結果】

調査票配布数293部、回収数259部88.4%、有効回答数230部78.5%。男性187名81.3%・女性43名18.7%、学年分布は1年生：64名27.8%、2年生：66名28.7%、3年生：56名24.3%、4年生：44名19.1%であった。喫煙状況は、現喫煙者22名9.5%、過去喫煙者8名3.5%、非喫煙者200名87.0%であった。現喫煙者の喫煙開始年齢は19歳以下7名31.8%、20歳以上15名68.2%で、現喫煙者の喫煙期間は1年未満5名22.7%、1年以上2年未満7名31.8%、2年以上3年未満4名18.2%、3年以上5年未満6名27.2%であった。KTSND得点（平均±SD）は喫煙経験者13.9±6.6点、非喫煙者12.9±6.2点で、正常範囲（9点以下）の割合は喫煙経験者23.3%・非喫煙者31.5%で、両者間で有意な差は示されなかった。喫煙者のFTND得点（平均±SD）は3.3±2.3点で、低依存11名50.0%、中等度依存9名40.9%、高依存2名9.1%であった。RSAS得点では「快樂・リラックス」因子が他因子に比べ高く、RSASとFTNDとの関連では「習慣」因子に有意な相関（ $r=0.56$ ）が示された。

## 【考察】

非医療系大学生における喫煙に対する認識はKTSND得点の高さから、喫煙の有無に関係なくタバコへの認知の歪みが認められた。現喫煙者は快樂・リラックス効果を期待し喫煙を開始する傾向がうかがえ、低依存～中等度依存の者が多く分布することが示された。